

A-218 Serous surface papillary carcinoma of the ovary (SSPC) の一剖検例

症例：52歳，女性

臨床経過：1988年3月頃から心窩部痛があり，鳥取大学第一内科を受診した。この時，腹水と胸水を認め細胞学的に腺癌と診断された。血清学的に CA 125 が 3500 U/ml と高値で卵巣癌を疑ったが，骨盤 CTscan では卵巣，子宮に異常は無く，消化器，呼吸器にも腫瘍は認めなかった。確定診断不明のまま化学療法を行ったが全経過一年半で死亡した。

剖検所見：淡血性，混濁した腹水 4,000ml，左胸水 1,300ml を認めたが右胸膜は癒着していた。両卵巣は大きさ正常で肉眼的に腫瘍は認めなかった。腹膜は臓側，壁側とも肥厚し，両側胸膜には粟粒大から小豆大の腫瘍を認めた。リンパ節は胃，脾周囲，腸間膜，後腹膜に径 1 cm から 2 cm に腫大したものを認めた。

病理組織学的所見：腫瘍細胞は立方形の胞体と類円形の核を持ち両側卵巣では漿膜面より表層に近い卵巣実質内に乳頭状の腫瘍細胞の増殖を認めた（写真 1，2）。消化管では漿膜面より粘膜下組織にかけ，また，脾，肝では肥厚した漿膜に腫瘍細胞の浸潤を認め，一部では実質内にも転移を認めた。腫大したリンパ節にも転移が見られ腸間膜リンパ節には psammoma body を認めた。

組織化学的には腫瘍細胞内に PAS 反応，Alucian blue, mucicarmin, colloidal iron 陽性物質があり，これらはジアスターゼ消化，ヒアルロニダーゼ消化に抵抗性であった。免疫組織化学的には腫瘍細胞は EMA, CAM 5.2, PKK 1 陽性，KM277（抗中皮抗体），Vimentin 陰性であった。

まとめ：卵巣内には腫瘤を形成せず，表面より一部実質内に腫瘍細胞が増殖し通常の卵巣漿液性腺癌とは異なり，浸潤形態から鑑別を必要とする悪性中皮腫とは組織化学的，免疫組織化学的に異なる SSPC の一例を報告した。

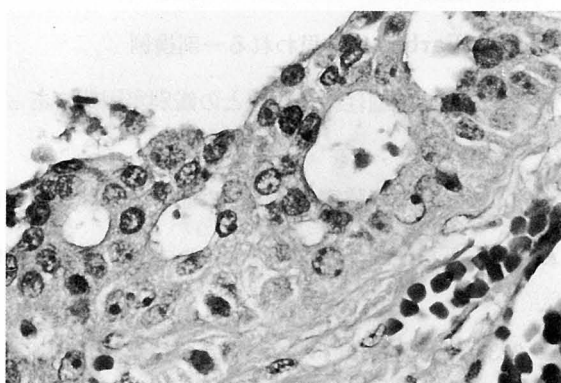
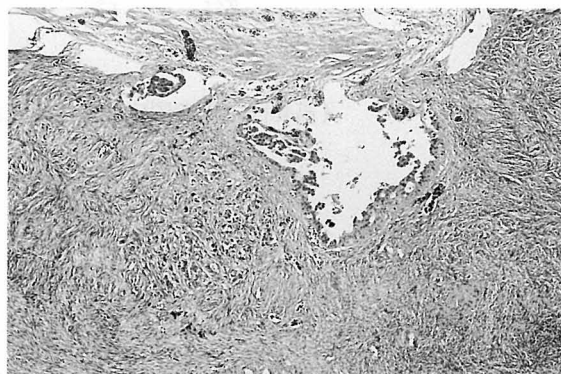


写真 1：卵巣表面に乳頭状に増殖する腫瘍細胞を認める。×40

写真 2：腫瘍細胞は立方形で核は類円形である。×400

文献 1) Gooneratne S. et al. : Serous surface papillary carcinoma of the ovary : A clinicopathologic study of 16 cases. *Int. J. Gynaecol. Pathol.* **1** : 258-269, 1982. 2) White P.F et al. : Serous surface papillary carcinoma of the ovary : A clinical, pathologic, ultrastructural and immunohistochemical study of 11 cases. *Pathol. Ann.* **20** : 403-418, 1985.

安達博信（鳥取大学一病理）